

コラージュ作品における自己像・他者像とパーソナリティの関連 — 統一素材を用いた検討 —

A Study on the relationship between the Self Image and the Others' Image of Collage Work and Personality — Using the Standardized Materials —

鶴木 恵子
Keiko UNOKI

要 旨

本研究の目的は、コラージュ作品の自己像・他者像とパーソナリティの関連性を検討することである。対象は、女子大学生76名だった。まず、MPI、SDS、自尊感情尺度を施行した。次に素材を統一し、テーマを設定せずにコラージュ制作を求めた。最後に作品の写しを提示して、自己像・他者像の有無やイメージなどへの回答を求めた。その結果、対象者の半数に自己像が示され、その8割は制作者と同じ属性（女性）であった。自己像は、自分に似ているというよりは、理想像にやや近いという結果となった。作品評価との関係では、自己像がある者はない者に比べて、作品に好意を抱き、満足感が高かった。パーソナリティとの関係では、自己像の確信が高ければ、自尊感情が高く、抑うつ傾向が低かった。自己像が制作者と同じ属性（女性）である場合は、そうでない場合に比べて、自尊感情が高かった。また他者像がある者はない者に比べて外向性が高いという結果になった。最後にコラージュ作品の分析的観点に関する示唆を行った。

I. 問題と目的

コラージュ療法とは、「雑誌などの印刷物からの切抜きを台紙に貼り付けて作成してもらい、作品内容や制作行動を手がかりにクライアントの内的世界や心理的状态を理解しようとする療法」である。コラージュの効果には、心理的退行、自己

表出（気持ちの解放）、内面の意識化、自己表現と美意識の満足、言語表現の補助的要素、診断材料、ラポール・相互作用・コミュニケーションの媒介などがあると言われる（杉浦, 1994）。この指摘をもとに、鈴木・佐藤（2000）は、大学生によるコラージュ作成の心理的效果を検討し、質問紙調査による因子分析の結果、4因子「自己への

理解」「自己への解放」「楽しさと集中」「コミュニケーション促進」を抽出している。第一因子「自己への理解」（質問項目「自分の内面を表せた」「自分を表現できた」など）と第二因子「自己への解放」（質問項目「解放感を味わった」「達成感があった」など）で累積寄与率は51.1%となっていた。自分とうまく向き合えたり、普段抑圧している欲求を解放できるなどの体験が、大学生（非臨床者）にとって心理的な効果を及ぼしたと言えるだろう。

では、コラージュ制作では、自己はどのように表現されるのであろうか。鶴木（2009）はコラージュ作品の内容分析と神経症傾向の関連を検討し、神経症傾向者特有の特徴を示した。この内容分析では、一般に切片（切抜き）を客観的な指標（それが何であるか）に基づいて分類していく。しかし、制作者本人のイメージがその切片に投影されているのであって、客観的な分類だけでは、当然のことながら、制作者の内的世界を理解することはできない。たとえ紙面の中央（空間象徴理論では自己の領域）に制作者と同じ属性の人物が貼り付けられていたとしても、それが自己像であるかは、本人に尋ねるほかないのである。

コラージュで“自己像をどのように表現するか”は「自己への理解」や「自己への解放」といった心理的效果に大きな役割を果たすものと考えられる。本研究では、コラージュ制作後に、制作者本人に作品を再提示し、自己像があるかどうか、ある場合には、どのような切片で表現されているかなどを明らかにする。この自己像の表現のあり方によって、制作者は自身の作品をどのように評価するのか、また制作者のパーソナリティとの関係はどのようなものかを検討する。なお、本研究では、パーソナリティ指標として、外向性・内向性、神経症傾向、抑うつ傾向、自尊感情を取り上げることとした。いずれの指標も、精神的健康に関連するものである。コラージュ作品を通して、精神的な健康状態を的確に理解するための基礎資料を

得ることをねらいとしている。

現在までのところ、コラージュ作品の自己像・他者像を扱った研究は数少なく、園田・近藤（2006）と園田・片岡（2007）などである。園田・近藤（2006）では、「これからの私」というテーマでコラージュ制作を行い、完成後学生同士がペアとなり、作品の印象評定を求めたり、自己像や制作後の感想などの聞き取りを行っている。さらにSOC（Sense of Coherence）や特性不安、抑うつとの関連性を検討した。その結果、精神的な健康度が低いと作品に対する不全感が強いこと、適度なSOCとコラージュ作品に自分が表現されていることとは関係があると述べている。園田・片岡（2007）は、コラージュ制作後に質問紙で人物の有無や感想をたずね、愛着スタイル尺度への記入を同時に求めた。その結果、アタッチメントスタイルによる自己像・他者像の表れ方を比較している。

本研究の仮説としては、適度なSOCと自己像の関係（園田・近藤，2006）が示されたことを考慮すると、自己像がある者はない者に比べて、作品を肯定的に評価し、精神的健康度が高いだろう、つまり、神経症傾向・抑うつ傾向が低く、自尊感情が高いだろうと考えられた。さらに、その自己像について確信度（確かに自分であるという感覚）が強いほど、自尊感情が高いだろうと考えられた。コラージュ作品に自分を意識することができるのは、自己の確立や安定性が根底にあることが想定されたからである。また、自己像は、現実の自分の属性と同じとは限らず、様々な切片でも表現されているという（園田・近藤，2006）。しかしながら、自分の属性と同じ内容（女子大学生であれば、女性）を貼る者の方が、そうでない者（動物や小物を自己像とする場合）に比べて、より自尊感情が高いだろうと考えられた。自分を動物や小物に見立てる場合には、現実の自分から回避したいという感情が根底にあるのではないかと思われるからである。その他、他者像については、他者

を作品内に置く場合は、対人的な積極性の表れと関連すると考えられるので、他者像がある者はない者に比べて、外向性が高いであろうと思われる。本研究は、以上の仮説を検証するとともに、コラージュ作品の自己像・他者像に関する基礎資料を得ることを目的とする。

なお、本研究の方法上の特徴は2点ある。まず第一に、素材の統一を行った。従来のコラージュ研究では、素材を本人に持参させているか、調査者があらかじめ図版を選定し、カラーコピーしたものを全員に配布するかどちらかの方法をとっている。しかし、本研究では、共通した素材（雑誌媒体）を全員に配布するという新しい方式をとることとした。その理由は、各自の雑誌選定をまかせた場合に、その時点から本人の好みや価値観が反映しやすくなるとも考えられるが、施行条件に統一性がなく、制作者にとって使用したいと思える素材の充分度によっても、作品の完成度に個人差が生じやすいこと、調査者が選定した素材では、制作者の好みの多様性を十分に反映しきれないことが挙げられる。

次に、教示についてである。本研究では、“私”や“自分”に関するテーマを提示しなかった。コラージュ作品の自己像や他者像を扱った先行研究（園田・近藤，2006；園田・片岡，2007）では、「これからの私」というテーマで制作を求めている。しかし、教示で自己と関連するテーマを与えた場合には、制作者の自然な自己表現が妨げられる可能性も考えられる。より投影法的な意味合いを重視するために、制作前の教示でテーマを与えることはしなかった。

II. 方法

1. 調査対象者・実施方法

埼玉県内の私立女子大学において、心理学に関連する授業（「臨床心理学概論」）の講義時間を利用して調査を行った。この授業は、心理学系学科1年の必修科目である。

調査は、3回にわたって行われた。まず、1回目の調査（2009年10月30日）では、パーソナリティや精神的健康度を測定する質問紙調査を行った。内容は2つの尺度から構成されている。パーソナリティを測定するMPI及び自己記入式抑うつ尺度SDSであった。施行時間は約10分であった。

2回目は、2009年11月6日（学籍番号奇数クラス）及び13日（学籍番号偶数クラス）にコラージュ制作を施行した。コラージュ制作にあたっては、授業の一環として、コラージュを制作する旨を伝え、やり方の説明を行ったが、その効果や影響について事前に伝えることはしなかった。なお、事前にコラージュを制作したことがある者は、数名存在したが、グループ制作や美術の授業での経験であって、本調査の方法によるコラージュ制作を行った者はいなかった。前後に自己効力感と自尊感情を測定する質問紙への記入を求めた。2種類の尺度に回答する時間はおよそ5分程度であった（なお、本研究では制作前に施行した自尊感情質問紙の結果のみを使用する）。

3回目は、2010年1月22日に実施した。2回目に制作されたコラージュ作品について自己像・他者像の有無やその場所、イメージについて質問紙により回答を求めた。コラージュ制作直後に質問紙を行わなかった理由は、杉浦（1994）の考えに基づいた。杉浦は、コラージュ完成直後では、作品の説明を求めてもなかなか言語化できないことが多いが、一定の時間を経ってから作品を見ると内容を説明することが可能になると述べている。筆者自身も同様の体験をしており、あえて制作直後に作品の内容を問うことはしなかった。

3回の調査すべてに参加した調査対象者数は90名、平均年齢±SDは、18.56±.59歳であった。

2. 質問紙調査

2.1 日本版 MPI

Eysenck, H. J により作成された質問紙法の性格検査、モーズレイ性格検査(Maudsley Personality Inventory)の日本版である。「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で回答する(MPI研究会, 1969)。この質問紙は、外向性(extraversion)・内向性(introversion)と神経症的傾向(neuroticism)の2因子を測定するために24項目から構成されている。その他、虚偽発見尺度(L尺度: Lie scale) 20項目が含まれている。虚偽発見尺度得点が20点以上の場合、妥当性が低いと考えられ、再検査を行うことが望ましいとされている。

2.2 自記式抑うつ尺度 SDS

SDS (Self-rating Depression Scale) は、Zung W, K によって作成された抑うつ性を評価する自己評定尺度である。20項目の質問からなる。第1、第3項目は感情について、第2、第4から第10項目までは生理面、第11から第20項目までは心理面の症状についての質問である。回答方法は、「頻繁に」、「しばしば」、「ときどき」、「ときには」の4件法によって行われる。最低20点、最高80点からなり、点数が高いほど抑うつ度は高いとされている(福田・小林, 1983)。

2.3 自尊感情尺度

Rosenberg (1965) が作成した自尊感情を測定する尺度の邦訳版を用いた(山本・松井・山成, 1982)。「だいたいにおいて、自分に満足している」「自分に対して肯定的である」など10項目から構成され、5件法で回答する。内の一貫性、因子的妥当性は高いと推測されている(山本ら, 1982)。

自尊感情を測定する尺度は様々な開発されているが(Coopersmith, 1967; Janis & Field, 1959)、筆者による別の研究でコラージュ制

作や授業の前後に複数回測定する必要があるために、調査対象者に負担の少ない尺度を選定することとした。

3. コラージュ制作

3.1 コラージュ素材の選定

コラージュ制作に必要な雑誌の選定に関しては、できるだけ調査対象者の興味関心の高い雑誌を選ぶことが重要だと考えられたため、事前(2009年10月)に予備調査を行った。まず、第1回の調査(10月23日)として、「最近、よく読む雑誌名をいくつか挙げてください」に対して自由記述で回答を求めた。第2回(10月30日)では、第1回の調査でもっとも多く記入のあった『non-no』(集英社)に対する興味の程度について、「興味ない」から「かなり興味がある」の4件法で尋ねた。その結果、85.6%の調査対象者は程度の違いはあっても「興味がある」と回答し、「興味がない」と回答したのは14.4%であった。そこで、本研究の調査対象者にとって、『non-no』が統一的使用素材としておおむね適正であると判断し、使用することとした。なお、『non-no』は主に女子大学生を対象としたファッション雑誌であり、同世代の女性モデルや洋服、化粧品、アクセサリなどの写真が多く掲載されている。筆者が以前行ったコラージュ作品の内容分析では、雑誌を調査対象者に持参してもらったが(鶴木, 2009)、その際に確認された切片のカテゴリーと、『non-no』に掲載されている内容は、ほぼ共通している。

3.2 手続き

本研究では、集団でコラージュを行うために、マガジン・ピクチャー法を用いた。調査対象者には、事前に、のり、はさみを持参するように依頼した。八つ切の画用紙及び制作者全員が共通して使用する雑誌(『non-no』2009年11月20日号、集英社)は、筆者が用意

した。制作にあたり、特定のテーマを設定することはしなかった。

また、制作時には、席が近い者の作品に影響を受けることも考えられるため、席をひとつ置きとし、雑談せずに制作に集中するように注意した。所要時間は60分程度であった。

制作終了後には、作品のテーマやタイトルの自由記述、作品に対する自己評価として「好き」「自分らしい」「満足度」についてそれぞれ5件法（否定的評価を1～肯定的評価を5とする）、「素材が充分だったかの程度」について4件法で尋ねた（「不十分」を1とし、「かなり充分」を4とする）。

4. コラージュ作品に関する質問紙調査

各調査対象者ごとの作品をデジタルカメラで取り込み、調査用紙の冒頭に縦8 cm×横12.5 cm（縮尺30%）のモノクロの写真データを貼り付けた。自分の作品を見て、自己像・他者像に関する質問に回答することを求めた。

(1) 自己像に関する質問項目

① 自己像に対する認識：コラージュ作品内に自分自身（自己像）が貼ってあるかを尋ねた。回答は「確実にある」「ややある」「たぶんある」「ない」の4件法である。「ある」「ない」の2件法にしなかったのは、多くのコラージュ制作者は、意図的に自己像を貼っていることは少なく、こうした質問によって初めて自己像という視点から作品を見つめなおすと「明確に“ある”とは回答しにくい」「ない」とも言えない」といった曖昧な回答が多く聞かれることによる（鶴木、準備中）。よって、意識の程度（確信度）として、「確実に」「やや」「たぶん」の3段階を設けた。

なお、自己像は「ない」と回答した者は、次の設問（他者像に関する質問）へ進むように誘導した。

②「確実にある」「ややある」「たぶんある」と回答した者には、自分の作品コピーのうち該当する場所を鉛筆で囲むよう依頼した。その回答を見て、筆者はその切片の内容と位置を分類することとした。

③その自己像について、「理想像である」「自分に似ている」かどうかを「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

(2) 他者像に関する質問項目

① 他者像に対する認識：コラージュ作品内に他者（他者像）が貼ってあるかを尋ねた。回答は「確実にある」「ややある」「たぶんある」「ない」の4件法である。

なお、他者像は「ない」と回答した者は、調査用紙への回答は終了となった。

② ①において「確実にある」「ややある」「たぶんある」と回答した者は、該当する場所を色のついたペンで囲むよう依頼した。その回答を見て、筆者はその切片の内容と位置を分類することとした。

③ 自分と他者との関係について、「父親」「母親」「きょうだい」「女友達」「男友達」「恋人」「ペット」「その他」の該当する項目に丸をつけてもらった。「その他」と回答した場合には、説明を自由記述で求めた。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、本研究で使用されるデータは個人的な解析を行わず、統計的に処理すること、データの保存管理、及び研究終了後の適切な処理について説明を行い、同意を得た。

6. 解析方法

結果の統計処理はすべて PASW statistics 17.0 for Windows (SPSS, 2009) で行った。

Ⅲ. 結 果

解析にあたり、筆者が用意した統一媒体が、調査対象者にとって素材として充分であったか否かを検討することとした。まず、コラージュ制作後の「素材充分度」と作品の自己評価のうち「満足度」の関係を見るために、*Pearson* の相関係数を算出したところ、 $r=.24$ ($p<.05$) となった。つまり、素材が不十分であるほど、作品に対して満足度も低くなっていた。このことから、自分が表現したい素材がないために、思うような作品ができなかった調査対象者も含まれていると考えられた。そこで、今後の解析では、「素材充分度」において「かなり不足」(2人)、「やや不足」(12人)と回答した者を解析から除き、76人を対象とすることとした。なお、MPI 尺度(外向性・内向性と神経症傾向)の解析の際に、虚偽発見尺度得点が20点以上となった者(6人)は、結果の妥当性が低いと考えられたため、対象から除外した。

1. コラージュ作品における自己像の表れ方

① 自己像に対する認識

コラージュ作品内に自分自身(自己像)が貼ってあるかを尋ねたところ、「確実にある」

(4人; 5.2%)、「ややある」(24人; 13.2%)、「たぶんある」(24人; 31.6%)、「ない」(38人; 50%)となった。よって、程度の差はあれ自己像が「ある」と回答したもの(38人; 50%)と「ない」と回答したものは半数ずつとなった(図1)。

② 自己像として貼られた切片の内容

「ある」と回答した者が記した自己像について、どのような切片が貼られているか内容を分析した。その結果、「女性」が30人(78.9%)、「動物」3人(7.9%)、「小物」「食べ物」がそれぞれ2人(5.3%)であった(図1)。

③ 自己像が表現される位置

紙面を縦に2分割、横に3分割し、6つの領域に区分した。左上をA、中央上をB、右上をC、左下をD、中央下をE、右下をFと命名した。自己像が広い領域にわたった場合には、該当する領域に複数箇所カウントすることとした。領域ごとに、自己像を貼った人数と割合(自己像があると回答した総数における割合)は、Aは8人(21.1%)、Bは14人(36.8%)、Cは10人(26.3%)、Dは7人(18.4%)、Eは8人(21.1%)、Fは12人(31.6%)となった。

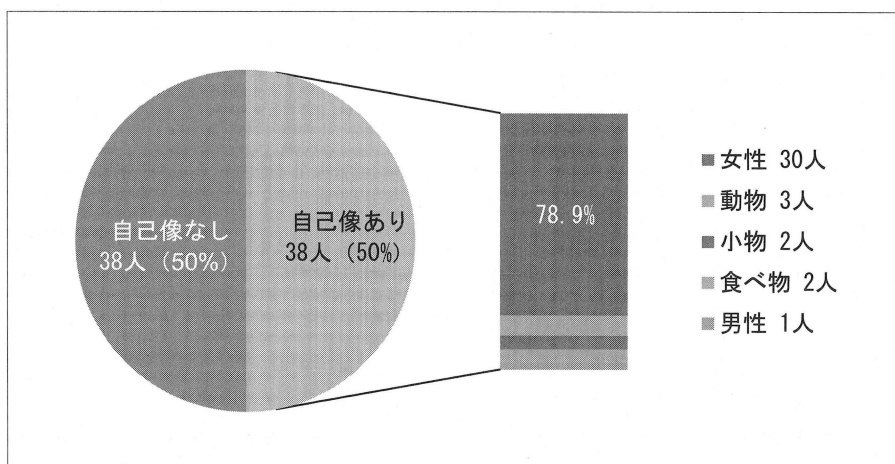


図1. 自己像の有無とその切片内容

④ 「理想像」「自分と似ているか」の程度

自己像が「理想像である」かどうかを「とてもあてはまる (3)」から「全くあてはまらない (0)」の4件法で回答を求めたところ、平均 (SD) は1.53 (.92) となった。同様に自己像が「自分に似ている」かどうかを「とてもあてはまる (3)」から「全くあてはまらない (0)」の4件法で回答を求めたところ、平均 (SD) は.86 (.96) となった。つまり、コラージュ作品に表現された自己像は、現在の自分に似ているというよりも、理想的なイメージに近いが、その程度はそれほど強くないことが示された。

2. コラージュ作品における他者像の表れ方

① 他者像に対する認識

コラージュ作品内に他者 (他者像) が貼ってあるかを尋ねたところ、「確実にある」11人 (14.5%)、「ややある」8人 (10.5%)、「たぶんある」12人 (15.8%)、「ない」40人 (52.6%)、未記入は5人 (6.6%) となった。ただし、この5人は他者像の位置を作品中にマークしていることから、他者像が「ある」 (ただし確信度は不明) と判別された。よって、確信度の違いはあるものの他者像が「ある」は36人 (47.4%)、「ない」40人 (52.6%) となった。

② 他者像として貼られた切片の内容

「ある」と回答した者36人が記した他者像について、どのような切片が貼られているか内容を分析した。複数の切片を他者像として示した者がいるため、合計は44となった。その結果、切片の種類ごとの人数と他者像ありとした者36人における割合は、「女性」が22人 (61.1%)、「動物」11人 (30.6%)、「男性」4人 (11.1%)、「小物」4人 (11.1%)、「人形」2人 (5.6%)、「文字」1人 (2.8%) であった。

③ 他者像が表現される位置

自己像の位置分類と同様に、領域ごとに、他者像を貼った人数と割合 (他者像があると回答した総数における割合) を算出した。その結果、A は14人 (38.9%)、B は15人 (41.7%)、C は21人 (58.3%)、D は8人 (22.2%)、E は15人 (41.7%)、F は14人 (38.9%) となった。

④ 他者像に関する自分との関係

制作者から見て、どのような関係にある他者が表現されているかを分類した。その他が17人 (47.2%)、女友達9人 (25%)、ペット8人 (22.2%)、恋人3人 (8.3%)、母親ときょうだいそれぞれ2人 (5.6%) であり、父親や男友達と回答した者はいなかった。その他の内容に関する自由記述を設けたが、記述がなかったため、詳細は不明である。しかし、家族や友人以外の者だとすると、ごく身近な関係にある者というよりは、やや遠い対人関係にある他者や著名人、世間一般をイメージした者も含まれていると推測される。

3. 自己像の有無と作品評価・パーソナリティの関連

① 自己像の有無と作品評価の関連

自己像が「ある」と回答したものは、「ない」と回答した者に比べて、作品に対して肯定的な評価を行うであろう、という仮説を検討するために「好き」「満足している」「自分らしい」について自己像あり群となし群の対応のない t 検定を行った (表1)。その結果、自己像あり群はなし群に比べて、有意に「好き」と「満足度」の評価が高かったが (t (66.5) = -2.64, $p < .05$; t (68.8) = -2.62, $p < .05$)、「自分らしさ」では差は見られなかった (t (74) = -1.46, $n.s.$)。

② 自己像の有無とパーソナリティの関連

自己像が「ある」と回答したものは、「な

い」と回答した者に比べて、自尊感情が高いであろう、という仮説を検証するために自尊感情得点について対応のない t 検定を行った(表1)。その結果、自己像あり群となし群には自尊感情得点の有意差は見られなかった($t(52)=-.79, n.s.$)。しかし、自己像の確信度の強さと自尊感情得点の相関を見たところ、 $r=.30$ ($p<.05$) と有意な正の相関を示した。

また、自己像が「ある」と回答したものは、「ない」と回答した者に比べて、神経症傾向及び抑うつ傾向が低いであろう、という仮説を検証するために MPI の神経症得点と SDS の抑うつ得点について対応のない t 検定を行った(表1)。その結果、自己像あり群は、なし群に比べて、抑うつ得点で有意に低かったが($t(69)=-2.15, p<.05$)、神経症傾向得点では差は認められなかった($t(65)=1.54, n.s.$)。

③ 自己像の切片内容と自尊感情の関連

自己像が「女性である」(制作者と同じ属性)と回答した者(20人)と、それ以外(「男性」「小物」「食べ物」「動物」と回答した者(5人)の自尊感情得点平均(SD)は、それぞれ29.15(8.38)と24.60(1.34)であった。女性であった群は、女性以外であった群に比べて、自尊感情が高いであろう、という仮説を検証するために、対応のない t 検定を

行った。その結果、自己像を女性をした群は、女性以外であった群に比べて、有意に自尊感情得点が高かった($t(22)=-2.31, p<.05$)。

4. 他者像の有無とパーソナリティの関連

他者像があり群はなし群に比べて、外向性が高いであろうという仮説を検証するために、対応のない t 検定を行った。外向性得点の平均(SD)は、他者像あり群(29人)は29.66(9.29)、なし群(38人)は22.42(10.97)となった。対応のない t 検定を行ったところ、他者像あり群は、なし群に比べて、有意に外向性が高かった($t(65)=-2.85, p<.01$)。

IV. まとめと考察

本研究では、素材を統一し、テーマを設定せずにコラージュ制作を行ったところ、半数に自己像が示された。その8割は制作者と同じ属性(女性)であったが、動物や小物、食べ物で表現される場合もあった。自己像は、自分に似ているというよりは、理想像にやや近いものが多いようである。

自己像の有無と作品評価との関係では、自己像がある者はない者に比べて、作品に好意を抱き、満足感が高かった。これは、「自己表出」による心理的効果の表れと考えられるだろう。自分らしさでは差が見られなかったのは、たとえ自己像がなくとも、自分で制作した作品に対する自負心、

表1. 自己像あり群となし群における作品評価・パーソナリティに関する得点の平均・標準偏差と t 値

		自己像あり群(N=38)		自己像なし群(N=38)		t 値	
		M	SD	M	SD		
作品評価	好き	3.92	.71	> 3.41	.96	-2.64	$p<.05$
	満足度	3.76	.82	> 3.18	1.09	-2.62	$p<.05$
	自分らしさ	3.87	.78	3.61	.79	-1.46	$n.s.$
パーソナリティ	MPI: 外向性	27.16	11.79	24.09	9.80	-1.16	$n.s.$
	MPI: 神経症傾向	28.22	11.91	32.29	9.73	1.54	$n.s.$
	SDS: 抑うつ傾向	42.72	8.29	< 46.89	8.02	2.15	$p<.05$
	自尊感情	28.15	7.56	26.75	5.39	-.79	$n.s.$

自分が作ったものだという思いが強かったからではないかと考えられる。

自己像とパーソナリティとの関係では、自己像の確信が高ければ、自尊感情が高いという結果となり、自己像が制作者と同じ属性（女性）である場合は、そうでない場合に比べて、自尊感情が高いという結果になった。自己肯定が強い者は、自分の属性を否定せず、表現することが多いからではないだろうか。さらに、自己像がある者は、ない者に比べて、抑うつ傾向が低かった。自己を客体として表現するには、自分をモニタリングしたり、様々な視点から自分を見る作業も行われるだろう。これは心的なエネルギーを要するもので、抑うつ傾向が高い状態では、表現しにくいのではないかと考えられる。

他者像については、ほぼ半数が貼り付けをしていた。制作者との関係性については、半数が日常生活に身近にいる存在を、残りの半数は関係の遠い存在を示唆していた。他者像の有無と外向性の関係を検討したところ、他者像がある者はない者に比べて外向性が高いという結果になった。

一枚の画用紙に自由に自分の気になったものを貼り付ける——一見、ごく単純な作業であるが、出来上がったコラージュ作品から、制作者の心のありようを映し出すことができる。本研究は、自己像・他者像という切り口から検討を行い、今後コラージュ作品を観る際の視点を示すことができたのではないと思われる。ただし、一般化するには、対象が少ないために問題も残されている。年齢や性別など様々な視点からも検討を重ねる必要があるだろう。

V. 引用文献

- 福田一彦・小林重雄 1983 SDS——自己評価式抑うつ性尺度（使用手引き） 三京房。
- Coopersmith 1967 The antecedents of self-esteem. San Francisco: W. H. Freeman.
- Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), Personality and persuasibility. New Haven: Yale University Press.
- MPI 研究会 1969 新・性格検査法 -モーズレイ性格検査- 誠信書房。
- Rosenberg, M 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press.
- 園田直子・近藤朗子 2006 コラージュの形式的特徴と自己の関連 久留米大学心理学研究 5, 13-20.
- 園田直子・片岡祥 2007 コラージュにおける自己像・他者像とアタッチメントスタイル 久留米大学心理学研究 6, 1-10.
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法 川島書店。
- 鈴木由美・佐藤いづみ 2000 大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究 聖徳大学研究紀要 短期大学部 33, 57-62.
- 鶴木恵子 2009 コラージュ作品の内容と神経症傾向の関連 日本心理臨床学会第28回大会発表論文集, 478.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

付 記

本研究にご協力下さった学生の皆さんに心から感謝いたします。